

2017年9月1日

2017年度 第28回中唐文学学会大会のお知らせ（第2号・最新）

残暑厳しき折、会員の皆様にはお元気で過ごしてはいかがでしょうか。第28回中唐文学学会大会は、10月6日（金）の12時10分より、山形大学にて、以下の要領で開催いたします。ふるってご参加くださいますようお願い申しあげます。

会 場： 学 山形大学 小白川キャンパス 地域教育文化学部3号館 312 講義室

（〒990-8560 山形市小白川町一丁目 4-12 TEL. 023-628-4744（代））

日 程： 10月6日（金）

12時10分 受付開始

12時50分 開会の挨拶

13時00分～13時50分 第一発表

敬亭山の印象 —— 謝朓から李白へ 発表者：石^{せき} 碩^{ますみ}（早稲田大学非常勤講師）

14時00分～14時50分 第二発表

宋之問『明河篇』と初唐の公主たち 発表者：種村 由希子（九州大学専門研究員）

15時00分～15時50分 第三発表

「浮」かんでいるもの——杜甫「登岳陽楼」における「乾坤日夜浮」の解釈をめぐって
発表者：大橋 賢一（北海道教育大学）

16時00分～16時50分 講演

唐代伝奇「鶯鶯伝」の反復される表現 —— 人物の思いをいかに読み取るか

講演者：葉山 恭江（大東文化大学）

17時00分～17時15分 総会

18時00分～20時00分 懇親会

於 山形大学 小白川キャンパス 厚生会館2階ホール

※懇親会費は **2500円** を予定しております。

各問い合わせ先

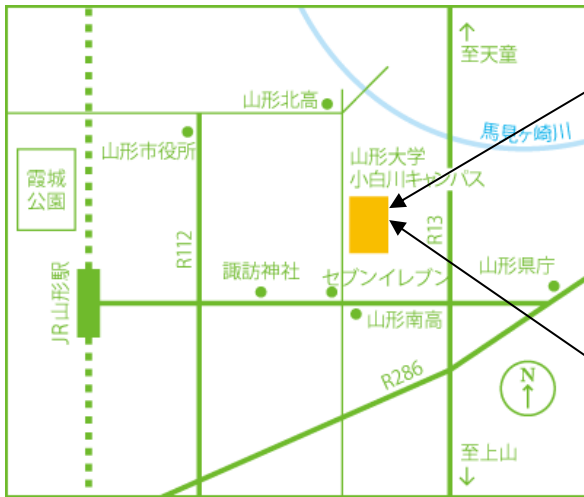
大会関連：三上英司 (mikami-e@e.yamagata-u.ac.jp)

幹事(会報・会計) 石村 貴博・潮田 央

幹事(名簿管理) 泊 功

幹事(連絡・ブログ・ML) 姜 若冰

JR山形駅から会場へのアクセス：(詳細は山形大学のホームページをご参照下さい)



★山形大学小白川キャンパス (大会会場)

JR山形駅から東方へ約2km (徒歩約25分)

山形大学専用シャトルバスを運行中です(所要時間約12分)

ベニちゃんバス「東くるりん 東原町先回りコース」

「山大前」下車(所要時間約9分)

市内路線バス「県庁前・県庁北口」行きで「南高前・山大入口」下車(所要時間約6分)、そこから徒歩約7分

★山形大学小白川キャンパス

[厚生会館 2F \(懇親会会場\)](#)

キャンパスマップ：



大会会場：地域教育文化学部3号館 312 講義室

懇親会会場：厚生会館 2F

お願いとお知らせ

※学会出張の手続き上必要書類がございましたら、幹事三上(mikami-e@yamagata-u.ac.jp)までお知らせ下さい。

※本会は、会費の納付で会員資格継続の作業を進めます。同封した振込用紙に金額をご記入の上、お振り込み下さいますようお願いいたします。

【振込先】 口座番号 00100-8-631654 口座名称 中唐文学会
正会員 3000 円、準会員 (会報の不要な方) 1000 円

準備の都合上、会費振込(あわせて大会・懇親会の出欠確認)は、

9月15日(金)までをお願いします。

敬亭山の印象 —— 謝朓から李白へ

石 碩 (早稲田大学非常勤講師)

宣城郡北部に位置する敬亭山について、南齊の詩人・謝朓は六首の詩（うち二首は聯句）を残しており、敬亭山の存在を世に知らしめた。六朝期には敬亭山を題材とする作品は謝朓詩を除いて他に見られず、敬亭山はまさしく謝朓の手によって、文學的素材として発見されたと言える。さらに唐代に入り、宣城における謝朓の足跡が注目されたことで、宣城郡に鎮座する敬亭山にもさらなる関心が集まる。加えて、宣城を足しげく訪れた李白が「獨坐敬亭山」詩をはじめとする数々の作品を残し、敬亭山はついに「五嶽に齊しい」名聲を勝ち得ることとなった（劉禹錫「九華山歌」）。

この敬亭山という山が、謝朓とその後の李白によって、文學的意味を備えた地理、すなわち「詩跡」となったことは、夙に指摘されているところであるが、謝朓の敬亭山詩にはどのような特徴があり、その後、敬亭山は唐代の詩人にどのように認識されてゆくのか、という問題については、なお幾つか補足すべき点があるように思われる。本発表では、謝朓から唐代に至るまでの敬亭山の詩を対象として考察し、その特徴について論じたい。

宋之問「明河篇」と初唐の公主たち

種村 由季子 (九州大学専門研究員)

「明河篇」は、従来、宋之問が、自らの待遇への不満を武則天に直訴するために創作した作品と考えられてきた。これは、晩唐の孟?『本事詩』に、「宋考功、天后朝に北門学士為らんことを求むるも、許されず、『明河篇』を作りて以て其の意をあらわ見す、末に云ふ、『明河は望むべくも親しむべからず、願はくは槎に乗りて一たび津を問ふを得ん。更に織女の支機石を将て、還た成都の売卜人を訪はん』と。則天其の詩を見、崔融に謂ひて曰はく、『吾は之問の才調有るを知らざるに非ず、但だ其の口過有るを以てするのみ』と。蓋し之問の齒疾を患ひ、口常に臭き故を以てするなり。之問終身慚憤す」とその創作背景が記されるためである。

ところで、上述の『本事詩』にも挙げるように、「明河篇」では「槎に乗る」「支機石」「売卜人」といった織女伝説に纏わる典故が多用される。だがこれらは決して宋之問独自の表現というわけではなく、同時代の詩人の作品を見てみると、特に公主の邸宅で開かれる宴席において類似の詩歌が散見される。本発表では、初唐の宮廷詩に着目し、「明河篇」の創作年代や創作意図について改めて検討したい。

「浮」かんでいるもの—杜甫「登岳陽樓」における「乾坤日夜浮」の解釈をめぐって

大橋 賢一 (北海道教育大学)

「登岳陽樓」は、杜甫晩年の代表的な作品であるが、第4句目の「乾坤日夜浮」については従来、解釈がわかれている。この解釈の相違については、松浦知久編『唐詩解釈辞典』（大修館書店1987年）や、原田種成「「乾坤日夜浮」について」（『新しい漢文教育』8号1989年、のち『私の漢文講義』大修館書店1995年）に詳しい。これらによれば、この句は、

- ① 広大な天と地（もしくは全宇宙）が昼も夜も湖水の中に浮かんでいる。
- ② 天地の万物（日月・星辰・山岳・草木・雲など）が、広々とした湖面に昼も夜もその姿を浮動させている。
- ③ 広大な天地間の広がりの中、満々たる湖水が昼も夜もただよい動く。
- ④ 広大な天地の広がりの中、あらゆるものが昼も夜も湖面に浮かんでいる。
- ⑤ 広い洞庭湖には、太陽と月がその中をのぼったり沈んだりする（原田説）。

という、5種の解釈にまとめられそうだ。

この句の解釈が一定しないのは、「浮」の主語である「乾坤」の解釈と、「浮」とはこの場合どのような意味合いで用いられているのかが判然としないからであろう。管見によれば、杜詩の「乾坤」に関する検討はいくつかみられるが、特に「浮」について検討している従来の研究は見当たらない。

そこで、本発表では、主に杜詩における「浮」の用法に着目することで、改めてこの句を再検討し、その上でこの句に対する私見を示し、「登岳陽樓」の魅力の一端を明らかにしてみたい。

講演要旨

唐代伝奇「鶯鶯伝」の反復される表現 ——人物の思いをいかに読み取るか

葉山 恭江 (大東文化大学)

「鶯鶯伝」は才子佳人の物語として後世の文芸に与えた影響が大きいため、後世の作品が「鶯鶯伝」をどのように受け継ぎ、改変を加えたかという点について言及されることが多い。また、「鶯鶯伝」そのものの研究で多いのは、作者元稹と作品との関係や、作中人物ことに鶯鶯の人物形象に関するもの、および張生の尤物、補過の説に関するものである。

作中人物張生が過ちを償った(補過)という記述は、何をもってそのように言えるのかが従来より注目を集めてきた。これについて、一つの考えを示してみたい。

反復(繰り返し)は、周知のように文学に多用される表現方法であり、音節や語句、イメージや出来事などさまざまなものがある。「鶯鶯伝」に見られる反復表現のなかでも、出来事の反復を中心として検討し、そこから読み取れる状況や人物の心情や思考を明らかにしてみたい。